

サハ語（ヤクート語）名詞句の内部構造

江畑冬生

(The Inner Structure of Yakut (Sakha) Noun Phrases)

Fuyuki EBATA

(pp. 1-12)

Contribution to the Studies for Eurasian Languages series vol.15

『チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究』

Native and Loan in Turkic Languages

九州大学人文科学研究院言語学研究室 Department of Linguistics, Graduate School of  
Kyushu University / ユーラシア言語研究コンソーシアム The Consortium for Studies of  
Eurasian Languages

2009 March

ISBN 978-4-903875-18-7

## サハ語（ヤクート語）名詞句の内部構造\*

江畑 冬生  
 （東京大学大学院）  
 fuyuki@mtc.biglobe.ne.jp

### 1. はじめに

本稿では、サハ語<sup>1</sup>（ヤクート語）における、複数の名詞から成る名詞句の内部構造を分析する。特に、所有型の分析に焦点をあて、これまで気づかれなかった新たなタイプが存在することを指摘し、その特徴を述べる。

#### 1.1. 並置型と所有型

サハ語において2つの名詞が1つの名詞句を形成するとき、次の2つのうちのいずれかの手法が用いられる<sup>2</sup>。

**並置型**    [名詞 A 名詞 B] のように、単に名詞を並べる

**所有型**    [名詞 A 名詞 B-POSS] のように、後項に所有接辞が現れる

---

\* 調査協力者として、主に Neustroeva Natalia 氏（30代女性）に協力して頂いた。深く感謝申し上げたい。本稿で用いたデータは、聞き取り調査に加え、Эдэр саас 紙（2年分、約40万語）および Кыым 紙（2年分、約90万語）から筆者が作成したコーパスデータを用いた。

<sup>1</sup> サハ語は、主にロシア連邦内のサハ共和国で話されているチュルク系の言語である。サハ語の音素は次の通り：/p, b, t, d, č[tʃ], ž[dʒ], k, g, s[s~h], x[χ~q], ʋ, m, n, ŋ[n], ŋ, l, r, j; a, aa, e, ee, o, oo, œ, œœ, u, uu, i, ii, u, uu, y, yy, uia, ie, uo, yœ/. 本発表では音素表記を用いるが、[s]と[h]に関しては音声的な隔たりも考慮し区別している。ロシア語からの借用語では上記以外の音が現れることもある。

<sup>2</sup> Afanas'ev (1996: 28) は、複合語構成要素の関係を a) 並列関係, b) 所有関係, c) 支配関係 の3つに分類している。Afanas'ev の言う支配関係とは「行為の対象＋行為名詞」の組み合わせだが、「行為の対象＋行為名詞」は結局のところ本発表で言う「並置型」あるいは「所有型」のいずれかにあたる。

## 1.2. 並置型の例

並置型は、構成要素の意味的關係が次のような場合に用いられる。

### 【前項が素材を表す】

<i>tirii son</i>	「皮のコート」 (皮+外套)
<i>sahul sava</i>	「キツネ皮の襟巻」 (キツネ+襟)
<i>kumaaxu xarču</i>	「紙幣」 (紙+金)

### 【同格関係】

<i>ostuoras ovoňnor</i>	「警備員の老人」 (警備員+老人)
<i>učuutal uol</i>	「教師の青年」 (先生+青年)

### 【比喩】

<i>tumus aruuu</i>	「半島」 (嘴+島)
<i>ot ilii</i>	「細腕」 (草+手)

### 【前項が後項の名称】

<i>žokuuskaj kuorat</i>	「ヤクーツク市」 (ヤクーツク+都市)
<i>saxa omuk</i>	「サハ族」 (サハ+民族)
<i>daaruja emeexsin</i>	「ダールヤお婆さん」 (人名+お婆さん)

## 1.3. 所有型の例

サハ語の所有接辞は、所有または所属の關係に幅広く用いられる。所有接辞のこの用法に加えて、以下に見るように、3人称単数の所有接辞-(t)Eが複合語マーカーのような働きをすることもある。

<i>saxa tul-a</i>	「サハ語」 (サハ+語)
<i>sir ah-a</i>	「蔣果 (ベリー類)」 (土地+食べ物)
<i>xarax xara-ta</i>	「瞳孔」 (目+黒)
<i>suŋaax uu-ta</i>	「よだれ」 (あご+水)
<i>taŋara žie-te</i>	「教会」 (神+家)

## 2. 所有型の特徴

本節では、所有型の名詞句の形態法上の振る舞いについて例を示しながら説明する。

### 2.1. 複数接辞

複数接辞は、名詞句を構成する2つの名詞のいずれにも付することができる。

- (1) xomus uuh-a

口琴 職人-POSS.3SG

「口琴職人」

- (2) xomus uus-tar-a

口琴 職人-PL-POSS.3SG

「口琴職人たち」

xomus-tar uus-tara

口琴-PL 職人-POSS.3PL

「口琴（複数）の職人」<sup>3</sup>

### 2.2. 格接辞

格接辞は、名詞句を構成する後項のみに付加する。その際 [語幹一所有一格] という形態素順になり、所有接辞は保存される。

- (3) xomus uuh-u-gar<sup>4</sup>

口琴 職人-POSS.3SG-DAT

「口琴職人に」

### 2.3. 派生接辞

派生接辞は、格接辞同様に後項のみに付く。ただしその際、派生接辞が所有接辞の後に付加される場合と、所有接辞を失い語幹に直接派生接辞が付く場合とがある。

<sup>3</sup> *xomustar uustara* で「口琴（複数）の職人たち」も表し得る。\**xomustar uus-tar-dara* のように、複数接辞と3人称複数の所有接辞とが同一語幹上で共起することはない。

<sup>4</sup> 絶対語末で広母音/u/であった所有接辞の母音が狭母音/w/と交替するのはサハ語の形態音韻規則によるものである。

- |     |   |  |
|-----|---|--|
| (4) | erbii    tiih-e<br>鋸    歯-POSS.3SG<br>「鋸の歯」     | erbii    tiih-i-nii <sup>5</sup><br>鋸    歯-POSS.3SG-DER<br>「鋸の歯のように／ような」 |
| (5) | kavkaz    kihi-te<br>カフカス 人-POSS.3SG<br>「カフカス人」 | kavkaz    kihi-tiji <sup>6</sup><br>カフカス 人-DER<br>「カフカス人っぽい」             |

#### 2.4. 所有接辞

所有型名詞句に対して、さらに別の所有者を表す所有接辞が付く際、新しい所有接辞は前項に付される。

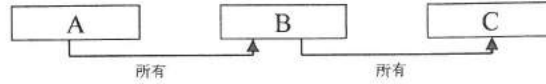
- |     |  |   |
|-----|--|---|
| (6) | atax    tajah-a<br>足    服-POSS.3SG<br>「はきもの」 | min    atax-um    tajah-a<br>私    足-POSS.1SG 服-POSS.3SG<br>「私のはきもの」         |
| (7) | atax    suol-a<br>足    跡-POSS.3SG<br>「足跡」    | kihi    atax-um <sup>7</sup> suol-a<br>人    足-POSS.3SG 跡-POSS.3SG<br>「人の足跡」 |

(6)や(7)のような名詞句の構造は、次の図1のように模式的に示すことができる。所有関係を表す所有接辞がそれぞれ現れ、意味上でも「AのBのC」という関係が成り立っている。

<sup>5</sup> 単独では *tüis-tii* 「歯のように／ような」。所有接辞の直後に現れる接尾辞の子音が/n/始まりになる点は、格接辞全般に見られる特徴である。所有接辞を残すタイプの派生接辞はここに挙げた-LIHの他に-TEEŋ「～での」があるが、起源的にはどちらも格接辞に由来するようである。これら派生接辞が格接辞と同じ形態素順を示すのは、歴史的理由によるのだと推察される。

<sup>6</sup> 単独で *kihi-tiji* 「人情味あふれる／（動物について）人間っぽい」。

<sup>7</sup> この-um（代表形は-(t)in）は、3人称者が「AのBのC」という関係で並ぶ時、「B」の後に現れる接辞である。筆者は、この接辞を3人称所有接辞の異形態と考えている。一方 Ubrjatova (1950: 42) では、この接辞は古いチュルク語の属格に由来する形式だとされている。



〔図 1〕 所有型の構造

## 2.5. 統語的緊密性

所有型の名詞句においては、意味的には複合語のように思える組み合わせであっても、(8)や(9)のように要素の挿入が許されることがある。つまり所有型は、複数接辞や所有接辞も含め前項と後項の間に要素の挿入を許す。これらの点から、所有型は複合語と言うよりは名詞句の特徴を備えていると言える。

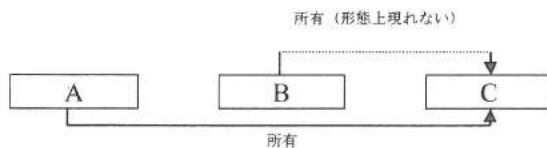
- |     |       |            |       |           |            |
|-----|-------|------------|-------|-----------|------------|
| (8) | saxa  | tuul-a     | saxa  | bilinji   | tuul-a     |
|     | サハ    | 語-POSS.3SG | サハ    | 現代の       | 語-POSS.3SG |
|     |       | 「サハ語」      |       | 「現代サハ語」   |            |
|     |       |            |       |           |            |
| (9) | xarax | uu-ta      | xarax | kuurbatax | uu-ta      |
|     | 目     | 水-POSS.3SG | 目     | 乾かない      | 水-POSS.3SG |
|     |       | 「涙」        |       | 「乾かぬ涙」    |            |

## 3. 所有連鎖型と所有置換型

2.4.節で見たように、所有型名詞句の外からさらに別の所有者を加えると、新しい所有者に対応する所有接辞は前項に付加される。しかしながら例は多くないものの、元の名詞句の後項にあった所有接辞が取り除かれ、その代わりに新しい所有者に対応する所有接辞が後項の方に付加されるタイプの所有型名詞句も見つかる。

- |      |       |              |     |          |                   |
|------|-------|--------------|-----|----------|-------------------|
| (10) | baluk | miin-e       | min | baluk    | miin- <i>im</i>   |
|      | 魚     | スープ-POSS.3SG | 私   | 魚        | スープ-POSS.1SG      |
|      |       | 「魚のスープ」      |     | 「私の魚スープ」 |                   |
|      |       |              |     |          |                   |
| (11) | æs    | xohoon-o     | min | æs       | xohoon- <i>um</i> |
|      | 言葉    | 詩-POSS.3SG   | 私   | 言葉       | 詩-POSS.1SG        |
|      |       | 「ことわざ」       |     | 「私のことわざ」 |                   |

模式的に表すと、(10)や(11)は次の図2のような構造になっている。所有関係を表す所有接辞は1つのみが現れる。また意味上でも「AのBのC」という関係は成り立っていない。



【図2】 所有置換型の構造

(10)の *baluk miine* 「魚のスープ」や(11)の *æs xohoono* 「ことわざ」は、(8)や(9)に示した所有型名詞句と表面上は同一であるように見える。しかし、新たな所有接辞を付加した際の振る舞いが異なっている。この新しいタイプは元の所有接辞を置き換えることから「所有置換型」と呼ぶことにし、従来のタイプは「所有連鎖型」と呼んで区別することにする。

### 3.1. 所有置換型の特徴

所有置換型では、複数接辞および所有接辞は前項に付かない。格接辞や派生接辞は「所有連鎖型」と同様、後項に付く。つまり「所有置換型」の前項は曲用しない。「所有置換型」の統語的緊密性は高く、二語の間に要素の挿入を許さない。

これらの特徴から、「所有置換型」を複合語だと考えたい。しかし(12)のように、前項が等位表現となって後項が共有されることも可能なことから、所有置換型にも若干の統語的自律性が確認できる。

- (12) *baluk uonna kus miin-e*  
 魚 と 鴨 スープ-POSS.3SG  
 「魚のスープと鴨のスープ」<sup>8</sup>

### 3.2. 所有連鎖型と所有置換型の両方が可能なケース

同じ名詞の組み合わせで、所有連鎖型と所有置換型との両方が可能なケースがある。例えば *xomus uuha* 「口琴職人」は、(13)の所有連鎖型と(14)

<sup>8</sup> 母語話者によれば、「魚と鴨のスープ」の意味にならないのは魚と鴨と一緒に調理することがないという一般常識からだという。

の所有置換型の両方が可能であり、かつそれぞれの意味も異なる。

- (13) saxa xomuh-un uuh-a  
 サハ 口琴-POSS.3SG 職人-POSS.3SG  
 「サハ口琴の職人」
- (14) saxa xomus uuh-a  
 サハ 口琴 職人-POSS.3SG  
 「サハの口琴職人」

前節で述べたように所有置換型の前項は屈折しない。従って、(14)の *xomus* 「口琴」は複数形にすることができない。ただし(16)のように、*uus* 「職人」を複数にすることは可能である。

- (15) saxa xomus-*tar*-un uus-tara  
 サハ 口琴-PL-POSS.3SG 職人-POSS.3PL  
 「サハ口琴（複数）の職人」
- (16) saxa xomus uus-*tar*-a  
 サハ 口琴 職人-PL-POSS.3SG  
 「サハの口琴職人たち」

*xomus uuha* 「口琴職人」の二語の間に *bastuy* 「最良の」を挿入した場合、「所有置換型」の意味では非文となる。

- (17) saxa xomuh-un *bastuy* uuh-a  
 サハ 口琴-POSS.3SG 最良の 職人-POSS.3SG  
 「サハ口琴の最も優れた職人」
- (18) \* saxa xomus *bastuy* uuh-a  
 サハ 口琴 最良の 職人-POSS.3SG

### 3.3. 所有置換型における要素の意味的關係

所有置換型が許される意味的組み合わせには、偏りが見られる。すなわち、前項が表す対象が具体的参照物 (referent) を指示するものではなく、



後項のうちのある種類を表すような限定の仕方に限られている。所有置換型の前項が具体的参照物を指さないのだとすれば、それに複数接辞や所有接辞が付かない意味的理由にもなる。以下には、筆者のこれまでの調査により得られた所有置換型の例をすべて示す。

<i>uu buld-a</i>	「漁労」 (水+猟)
<i>tyyleex buld-a</i>	「毛皮猟」 (毛皮を持つもの+猟)
<i>kuorat žon-o</i>	「町の人々」 (都市+人々)
<i>tua žon-o</i>	「村の人々」 (農村+人々)
<i>ovo kinige-te</i>	「児童書」 (子供+本)
<i>žie kætær-æ</i>	「飼育の鳥」 (家+鳥)
<i>uu kætær-æ</i>	「水鳥」 (水+鳥)
<i>žie kuul-a</i>	「愛玩動物」 (家+獣)
<i>ojuur kuul-a</i>	「森の獣」 (森+獣)
<i>tajša kuul-a</i>	「タイガの獣」 (タイガ+獣)
<i>oskuola ovo-to</i>	「学童」 (学校+子供)
<i>kuorat sir-e</i>	「都市部」 (都市+土地)
<i>tua sir-e</i>	「農村地区」 (農村+土地)
<i>mas uuh-a</i>	「家具職人」 (木+職人)
<i>timir uuh-a</i>	「鉄工職人」 (鉄+職人)
<i>xomus uuh-a</i>	「口琴職人」 (口琴+職人)
<i>oskuola yæreŋ-e</i>	「学校教育」 (学校+教育)
<i>æš xohoon-o</i>	「ことわざ」 (言葉+詩)

### 3.4. 共感度の影響

ある名詞句が「所有連鎖型」になるか「所有置換型」になるかを定める語用論的要因として、共感度の影響も指摘できる。

(10)の *baluk miine* 「魚のスープ」は所有置換型であり、そのため *baluk* 「魚」には所有接辞が付かない。しかしながら、「私の郷里の魚」という表現を用いた場合には、所有連鎖型を用いるのが自然であるという。

- (19) min dojdū-m balug-un miin-e  
 私 国-POSS.1SG 魚-POSS.3SG スープ-POSS.3SG  
 「私の郷里の魚のスープ」

(10)での「魚」は単にスープの種類を指定しているのに過ぎない。一方(19)では、「魚」に対する話し手の共感が認められる。(10)と(19)の違いが共感度の影響によるものかを確かめるため、以下では同一の構造を持つ対比的な例の比較を試みる。

(20)および(21)は「～学校」の例、(22)および(23)は「～人」の例である。それぞれ前項の名詞のみが異なっている。母語話者によれば、(20)や(22)のように *saxa*「サハ」が用いられれば常に前項に所有接辞を付けるが、(21)や(23)のように *saxa*「サハ」以外の語が用いられた場合は後項に所有接辞を付けても不自然ではないという。

(20) *yørem-mit saxa-m oskuola-ta*<sup>9</sup>  
 学ぶ-VN.PAST サハ-POSS.1SG 学校-POSS.3SG  
 「私が勉強したサハ語（で教育を行う）学校」

(21) *yørem-mit nuučča oskuola-m*  
 学ぶ-VN.PAST ロシア 学校-POSS.1SG  
 「私が勉強したロシア語（で教育を行う）学校」

(22) *børehe kørsy-byt saxa-m kihi-te*  
 昨日 会う-VN.PAST サハ-POSS.1SG 人-POSS.3SG  
 「私が昨日会ったサハ人」

(23) *børehe kørsy-byt žoppuon kihi-m*  
 昨日 会う-VN.PAST 日本 人-POSS.1SG  
 「私が昨日会った日本人」

母語話者から見れば、*saxa*「サハ」は共感度が高い名詞であり、それ故 *saxa*「サハ」に1人称単数の所有接辞を付けられるのだと考えられる。筆者は、名詞自体の共感度により構造の違いが生じる理由として、サハ語の所有接辞が単に所有や所属の関係を表すだけでなく、ある種の親疎感を

---

<sup>9</sup> サハ語では、関係節の修飾する主名詞が関係節中の主語にあたらない場合、関係節中の主語の人称・数に対応する所有接辞が主名詞に付けられる。

表すのにも用いられることと関係があるのではないかと推測している。<sup>10</sup>

#### 4. まとめ

本稿では、サハ語名詞句の2つのタイプのうちの1つである「所有型」の分析を行った。所有型名詞句の多くは、「所有連鎖型」になるが、いくつかの形態統語的テストを行った結果、それらとは異なる振る舞いを見せる「所有置換型」が見つかった。所有置換型の前項は曲用できないが、このことは前項が具体的参照物を指示せず、後項のうちのある種類を表すような限定の仕方に限られていることと関係していると思われる。

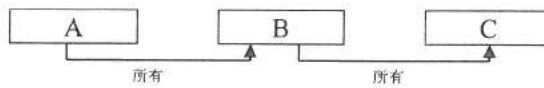


図1 (再掲) 所有連鎖型の構造

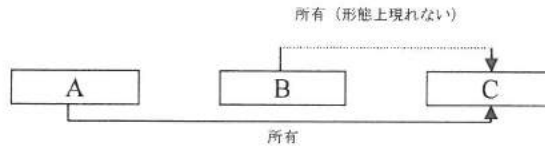


図2 (再掲) 所有置換型の構造

「所有置換型」は、[1] 可能な名詞の組み合わせが限られており、[2] 外見上は所有連鎖型との違いがなく、いくつかの形態統語的テストを行って始めて相違点がはっきりする。また、[3] 同じ構造でも共感度の高さにより所有連鎖型になってしまうこともある。これらの理由により、サハ語の「名詞+名詞」による名詞句としては第3のタイプとでも呼べる「所有置換型」の存在について、従来のサハ語研究では取り上げられなかったのだと思われる。

<sup>10</sup> 所有接辞の表す親疎感とは、所有・所属関係のないところでも、仲間意識や親しみがあれば所有接辞がよく用いられることを指す。例えば *uolbut kelbet* 「私たちの息子/青年が来ない」という文では、*uolbut* が「私たちの息子」という所有の意味以外に、「私たちの連れの青年」や「(レストランやホテルで) いつも私たちにサービス・応対してくれた青年」など、直接の所有関係のない間柄にも使われる。

## 略号

DAT	与格	POSS	所有接辞
DER	派生接辞	SG	单数
PAST	過去	VN	形動詞
PL	複数		

## 参考文献

Afanas'ev, P.S. (1996) *Saxa bilinji tula. Leksikologija*. [現代サハ語 語彙論]

Yakutsk: Sakhapoligrafizdat.

Ubrjatova, E.I. (1950) *Issledovanija po sintaksisu jakutskogo jazyka. I Prostoe predlozhenie*. Moskva-Leningrad: Nauka.

## **The Inner Structure of Yakut (Sakha) Noun Phrases**

Fuyuki EBATA  
University of Tokyo

The purpose of this paper is to analyze the inner structure of Yakut (Sakha) nominal phrases which are composed of two (or more) nouns. The special focus is on the possessive type, whose latter component has a possessive suffix. This paper points out that there is another ‘possessive type NP,’ which has never been noticed before, and describes the morpho-syntactic as well as semantic properties of this type.